



創刊に寄す 発刊に寄せて

農林省農林経済局長

小倉 武一

いつの時代でもそうではありますが、経済の自立の下に一国の繁栄があることは、今更申すまでもないことであり、今日の日本ほどこの経済自立が叫ばれている時はないのであります。もとより経済自立には諸方策がありますけれど、就中国土利用の高度化によって食糧を増産し、輸入食糧の節減と食生活の改善を図り、ひいては国家経済の収支に寄与して経済安定の基礎を図ることの必要なことは論を俟たない所であります。

然し乍ら一口に食糧増産と申しても之が実施に当り如何に土地を高度に利用するかということについては有形、無形の多くの問題があります。事業の大小、業種の多岐、工期の長短、更に加えてばく大なる国家資金の需要等々問題は尋常一様ではありません。之を解決すべく昭和二十六年春農林漁業資金融通特別会計制度の誕生を見、更に之が生々發展して今春農林漁業金融公庫の成立となったのも、に所以があるのであります。

御承知の通り我が国の金融機関を大別しますと二つの系列があります。即ち一般の民間資金を取扱う市中金融機関と政府資金を取扱うところの政府機関とあります。農林漁業金融公庫はいまでもなくこの政府機関でありまして、農林漁業の生産力を維持増進するのに必要な長期且つ低利の資金で、一般の金融機関が融通することを困難とするものを融通することを目的としております。ともかくも小さくなった日本の国土を寸土も余さず合理的に利用して、一粒よく万粒を実らせ、或は緑濃き茂山とし、或は水産物を確保し以って農林漁業経済の安定を図ることこそ公庫の使命であると同時に農林漁業政策の根底であり、又治国の根本であると申しても差支えありません。

公庫はこの点に鑑みられて、今般農林漁業資金の取扱にたずさわる方々の参考に資するため「公庫月報」を創刊し関係者に配布されることとありますが、これは極めて時宜を得た企てであり、誠によろこばしいことと存じます。ここに洋々たる農林漁業金融公庫の前途を祝福するとともに、この「月報」の発展を心より祈る次第であります。



一九五三年九月号

小倉 武一 (おぐら たけかず)

1910年福井県生まれ。東京帝国大学卒業後農林省入省。農林省時代は農業基本法成立に尽力。60年農林事務次官。退官後は農政エコノミストとして活躍。

文中にある「小さくなった日本の国土を寸土も余さず合理的に利用して、一粒よく万粒を実らせ、或は緑濃き茂山とし、或は水産物を確保し以って農林漁業経済の安定を図ることこそ公庫の使命」という言葉は今もなお、色あせることがない

気骨の農業者から寄せられた一通の手紙 巻頭言ある農民魂

白澤 道夫

昨年の秋、一通の手紙とともに見事ななしが一箱支店に届けられた。送り主は、福岡県の南部

にある筑後市の農業経営者Sさんという方であった。手紙によると、「五年前に総合施設資金を借りて土地を取得し、新植したなしが初結果したので、支店の皆さんで試食してほしい。そして、これからも私たち農業者に公庫資金で夢を与えてください。」というものであった。我々一同その手紙に大いに感激し、筑後平野に実った甘い豊水なしを分け合って賞味させてもらった。そのとき、私はSさんという方に強い関心を覚え、是非お会いして農業に対する氏の姿勢や信念、公庫資金への注文など生の声を率直に聞かせてほしいと思った。程なくSさんの福岡市に来られる機会があり、精悍で生真面目な感じのSさんと働き者らしい明朗な奥さんが、連れ立って支店に顔を出してくれた。

Sさんは、筑後市農協梨部会の若手リーダーで、昭和四八年以降父とともに総合施設資金と農地等取得資金を利用し（借入額合計四件、七六〇〇万円）、急速に果樹園の経営面積を拡大した。そして、現在では、なし一・九ha、ぶどう一

ha、採卵鶏八千羽、水田〇・六haを経営する専業農家である。

Sさん一家の農業経営についていろいろ話を聞いた後、公庫資金は借入手続、担保条件が難しくて利用しにくいという声を聞くがどうかと尋ねた。すると、「公庫資金はサラ金とは違うから、自分でしっかりと計画を立てるのは当然です。そうでなければ目標は達成できません。」という頼もしい回答であった。

また、Sさんの農業観について質問したところ、「口で言うのは難しいから、後で書いて送ります。」ということであった。

後日届いた書面は、表題に「土地は百姓の命。地力は汗の結晶なり。」と書かれた数枚のノートの紙片で、土地に対する強烈な想いを込めたSさん一家の三世代に及ぶ農業経営の歴史が綴られていた。氏の了解を得て、ここにその一部を紹介したいと思う。

Sさん一家は三代前に分家し、祖父母は、氏の言葉借りると水呑百姓として出発した。その祖父の時代に、Sさん一家にとって歴史的な大事件が起こった。それは、土地の境界をめぐる争いで



1990年3月号まで巻頭言は農林公庫幹部が執筆し、農業金融の前線から政策的なメッセージを送っていた

あった。耕地面積が狭かったばかりに村の中で不利な裁定を下され、煮え湯を飲まされた祖父の、死を覚悟した逆上ぶりと、身を挺してなだめ慰めた祖母のことが記されている。氏は、子供のころ祖母から繰返し聞かされたこの話から、跡取りとしての責任感を培われ、将来は必ず立派な専業農家になろうと堅く決心したと述べている。

Sさんの父は、祖父の無念を心に、「百姓の力は土地。土地の面積が勝負だ。」と教えた。

「土地は売手がなければどうにもならない。時期が大事だ。情報を早くつかみ、価格を値切るな。あの人に売って良かったと感謝してもらえぬ取引きをせよ。高く買った分は余分に働いて稼げ。」これが父の信念であった。

その後、Sさんは農学校を卒業し、就農するかわらわの青少年クラブの会長を務めるなど幅広い活動をしてきた。そのなかで県庁のある先輩に出会ったことが、氏の後の飛躍を決定する契機となった。その先輩は、「農地を買う資金策ならば、自分の経験と知恵を出して応援するから、日本一の百姓になれ。」と激励してくれた。そして、前述のとおり氏の経験面積の拡大が

実現したのである。幸いSさんの農業経営は順調に推移している。

最近、氏の所属する筑後市農協梨部会は、第一六回日本農業賞・金賞を受賞した。Sさんたち後継者グループの活動が、特に評価された結果で

あると聞いている。

農業を取り巻く環境は、内外ともにますます厳しい情勢にあり、地域農業の振興に中心的な役割を果たす担い手の育成が、農政上の緊急な課題となっている。こうしたとき、我々政策融資

を担当する者としては、Sさんたちのような多くのたくましい担い手農家を、今後とも支援し続ける存在でありたいと念願するものである。

(しらすわみちお 福岡支店長)

一九八七年五月号

誌面刷新で伝えたかったこと

農林漁業金融公庫元理事

村田 泰夫

むらた やすお

一九四五年東京都生まれ。農林漁業金融公庫元理事。AFCフォーラム編集責任者。(朝日新聞経済部記者、論説委員、編集委員として、経済政策や農業問題を担当)

「面白くてためになる記事を書け」。新聞記者の新人時代、先輩から繰り返し言われました。公庫の出版物にも当てはまると思います。私が公庫の理事になった二〇〇五年頃、『公庫月報』は職員の間であまり話題になりませんでした。

なぜなのか。月報で取り上げるテーマをあらかじめ一年分決めてしまっていたからではないでしょうか。各号で取り上げるテーマはタイミングを外さず、その都度決めることにしました。

また、農林水産業の現場や経営者の生の声を紹介する記事をもっと増やせば、さらに面白くなると思います。「農政改革いま現場では」シリーズを始めたのです。全国の経営者にインタビューし農政への注文を聞き、それに対する農林水産省の幹部職員のコメントを載せました。

経営所得安定対策など農政改革の考え方を農業者に理解してもらおうとともに、経営者の本音を農政当局に伝えるのが狙いでした。

『公庫月報』という誌名は、〇六年四月号から『AFCフォーラム』に変えました。「AFC」とは農業・林業・水産・食品・消費者を表し、「フォーラム」とは議論の場であることを表します。農林漁業者、行政、学界さらには一般消費者など、関係者に広く開かれた議論の場を提供しようと考えたからです。

表紙には、大地の美しさを撮った前田真三氏のカラー写真を使いました。反響は大きく、「お堅い政府系金融機関にしてはかなり異色」などと、お褒めの言葉？をいただきました。農林水産省の機関誌『a f f』の誌面刷新は、『AFC



白地を強調した異色の表紙。リセットした心情を表している。この直後、公庫月報はAFCフォーラムへと改題する

フォーラム』が下敷きになっています。

誌面では、女性を登場させることも心掛けました。農業就業者の約半分は女性で、公庫の融資先となる優秀な経営組織は、しっかりした女性が支えていることが多いからです。

取材は外部のライターその他に、広報課(当時)の優秀な女性職員を活用しました。慣れない事に戸惑うのはいつときだけで、女性たちがはつらつと仕事をする姿は頼もしいものでした。

大学教授ら外部筆者の原稿であっても、分りにくい原稿は了解を得た上でためらわずに直しました。遠慮せずに直すことで誌面の質を保つことができたと自負しています。

誌面刷新から一年。面白くてためになる雑誌に育ってくれたことをうれしく思います。